

1 報告の趣旨

鈴木大拙(1870-1966)の敗戦翌年の著作『靈性的日本の建設』(1946.9)における神道論を、近い時期に著された柳田國男『祭日考』(1946.12)のうち、柳田が「新国学談」の構想やその背景について敗戦後の状況と併せて語っている小文「氏神の研究」と対照し、両者が敗戦直後の時代に神道・神社を論じた意味を問う。

発表者の鈴木大拙への関心は、発表者の研究テーマの一つである井上友一(1871-1919; 内務官僚、神社合祀政策実施期の神社局長、明治神宮造営局長、東京府知事などを歴任)と、金沢の石川県専門学校、第四高等中学校時代に同級生であった、という所から出自している。しかし、大拙が神道論を発表した敗戦直後は井上が早世して四半世紀余りが過ぎていた。

本発表で大拙を、その井上が推進していた地方改良事業に参加していた柳田國男(1875-1962)と比較対照するのは、宗教学の関一敏[2011]が、敗戦を踏まえた両者の「靈性」「固有信仰」という「宗教像」を、「敗戦後のあるべき日本像を全力で読み解く老翁の実践的提言」と位置づけていたことに発想の起点がある(+山折哲雄[1968]も refer)。また、両者とも吉田茂(1878-1967; 1946年5月より首相)と親交があり*、それが占領期における両者の行動の背景の一つであった。

*大拙は 1936年、後に『禅と日本文化』の元になった講演旅行を欧米にした時に外務省と関わっており(形のうえでは外務省の派遣; C.R.Crane や牧野伸顕が関与したとも)、駐英大使であった吉田とも交流があった模様。柳田-吉田関係で明らかなのは、1946年に柳田が枢密顧問官になった時に吉田首相からの懇請によつたとされている(⇨refer 後藤総一郎[1988], p.965)。1921年に柳田が国際連盟に派遣された際、同年8月にロンドンに赴いており、その時吉田は外交官として在ロンドン日本大使館にいたが、この時柳田・吉田の交流があったかどうかは不明。もっとも、『定本柳田國男集』別巻4で初めて活字化された「大正11年日記」によれば、1922年の4月14日と18日に「吉田茂君」と会った記載があり(pp.378f.)、前後関係から初対面では無かったと推察される。柳田は、貴族院書記官長だった時代に貴族院議員だった、吉田の岳父牧野伸顕と面識があったと思われる。

敗戦直後の柳田による神道論については、「新国学談」3部作の第2『山宮考』(1947.6)について本年9月11日に日本宗教民俗学会9月例会で「柳田國男「山宮考」における靈山と神社の捉え方：とくに富士山に注目して」と題して研究発表しており、本発表ではそれと重ならないような対象を選んだつもりである。

一方で大拙『靈性的日本の建設』は、序「戦争礼讃 魔王の宣言」、第1編「靈性的日本の建設」、第2編「日本的靈性的自覚について」、付録「武人禅」、という4部構成となっている。このうち発表者は、第2編の一部パートを戦時中の講演原稿を敗戦後に活字化した文章として、柳田「敬神と祈願」(『氏神と氏子』1947に収録された、戦時中の講演録)と比較しながら考察したことがある(⇨由谷[2019])。本報告では、彼の神道論が展開されている第1編の4「日本的靈性的自覚と神道」および5「『力』と『国体』」を中心に考察することになるが、とくに4にはかつて報告者が考察した第2編と内容が重なる部分がある。

そこで、第1編の4および5に加えて他パートとの関連も含めて見てゆく。まず次の2で大拙について、上記の神道論に至る戦時期の流れを概観する。

2 大拙の禅浄一致論(仮称)と靈性論との結び付き、および戦時体制との関連

『禅と念仏の心理学的基礎』(1937.4;⇒全集4くなお、以下全集からの引用・参照は旧版を使用)；元の英文著作(1927, 33, 34)の一部を日本語で刊行した由。ここで云う“禅浄一致論”の最初期。長めの前篇が禅で、悟りを究極的な目的とする禅において、公案制度が特殊な発達を遂げており、その重要性を理解することで禅の大半が理解できるとする。短めの後篇が念仏で、公案における看話の工夫が念仏といかに関係するかを問う。これは、シナにおいて仏教が禅と念仏の二道に沿って発達してきたからとされる。一遍、白隠も参照され、名号を禅の立場からは唯心論的に理解できるとし、さらに念仏の称名化により生ずる経験は、看話工夫より結果するものと同質の意識形態だと結論づけられる。

『無心といふこと』(1939.5;⇒全集7)；講演録で6講から成る(実際の同信会@東京での講演は、4回だった由)。“無心”(＋無分別)を仏教思想の中心に位置づける。複数箇所で禅浄一致論が説かれる。第2講で、真宗において“絶対他力”とされる受動性は禅においても見られる、という例の一つとして、道元禅師の“身心脱落”を参照する(全集, pp.157ff.)。第4講では親鸞聖人の説く“自然法爾”は、正法眼蔵における“仏の御命”に関わる件に似ている(p.242)、等など；《＋第2講冒頭で靈魂 refer＋第4講で心学第2祖手島堵庵が盤珪の法語について、和尚の説法を靈明と表現した、という件を参照；＋敦煌文献が第5講で少し参照される＋“大和魂”も出て来る》

なお、結語で“神道”が“道”の使い方として参照されるが、神道そのものの分析は無い。

『盤珪の不生禅』(1940.3;⇒全集1)；盤珪永琢(ばんけいようたく；1622-93)に関する、大拙最初の著作。“無分別の分別”の観点より、仏教において“体”と“用”とを分ける発想の代案を求める；《←大拙の“体用論”については蓮沼直應[2020]refer》。盤珪が公案を快からぬとした理由の考察。盤珪の“不生”とは無分別の分別であるなど、直前の『無心といふこと』を継承するも、禅浄一致論は不在か。

『禅と日本文化』(1940.9;⇒全集11＋岩波新書)；1938年に英文で刊行された海外での講演録(の一部)の邦訳。禅浄一致論も戦時言説も明瞭ではないが、禅の教えと「潔く死ぬ」武士道との関連(新書, pp.61f.)、剣道に関連して神道は仏教ほど高度に精神的な意義に達していないこと、剣が靈感の対象であること(pp.65f.)、儒教に関連づけての神道批判(愛国的保守主義云々, pp.119f.) etc.

『東洋的一』(1942.10;⇒全集7)；「仏教生活と受動性」というパートが全体の半分以上を占めており、その中で、禅は自力と考えられているが実は受動的なものだ、という趣旨の議論が見られる(p.408ほか)。“靈性”が言及されること、戦時体制に迎合した(?)表現があることについては後述。

『浄土系思想論』(1942.12;⇒全集6＋岩波文庫)；第2論文「浄土観・名号・禅」では、浄土とは相互矛盾即自己同一で出来ており、その理由は回帰的相互往還するからである(文庫, pp.64fff.)。つまり、浄土と娑婆とは二元的に対立してはいない。矛盾の自己同一性を強調する点で、浄土教と禅は近い(というような意味か, pp.72ff.)。第1論文「極楽と娑婆」では、極楽は靈性の世界、法界である。絶対矛盾である故に同一性が成り立つというのが靈性の論理である(pp.16ff.)。靈性とは無分別の分別である(p.29)云々と、このパートでは禅浄一致論はあまり問題にされず、“靈性”が前景化している。もっとも第5論文「我観浄土と名号」では、支那で元明時代に禅と浄土教が接近し、称名が公案化したとされる(p.339)。

《↑同書の比較的オーソドックスな読みとして、末木文美土[2020]がある》

なお、柳田の場合、“氏神合同論”の前景化が1942年前後であり、それを由谷[forthcoming]では柳田の“戦時言説”と捉えた。大拙の場合、“靈性”が前景化してくることと戦時体制との関連があるかどうか？大拙靈性論に関する膨大な先行研究にも、おそらくそうした考察は無いだろうが、“靈性”の語が1942年『東洋的一』(ルソーへの言及の中で；全集7, p.333)や『浄土系思想論』で登場してくることとの関係は？

↳ cf. (戦時言説につき)『宗教経験の事実』(1943.6；全集10)で敗戦後の再版で除かれた箇所では「八紘為宇」の語が引用され、難渋な議論の末に「シナも印度も固より日本なのである」とされ、「わが日本の精神」が三国に留まらず拡大すること—大東亜共栄圏?—を肯定的に捉えているように思われる(全集10, pp.81f.)。また、先に触れた『東洋的一』では“大東亜戦争”が何度も言及され、積極的に主張されている訳ではないが、「一」とは大東亜共栄圏のように読めなくもない(全集7, pp.321ff.)。

『文化と宗教』(1943.2；⇒全集19)；かなり雑多なテーマ(例；英国人の気質、ベルグソンの昆虫観、禅寺の晋山式、盤珪を参照、靈魂の有無<結論無し> etc.)を含む一種の随想集。鈴木正三の念仏禅を参照(pp.206 ff.)。印度・シナを経た日本仏教の代表として、禅と真宗とを並列して比較(pp.209-214)。敵味方無く戦死者の霊を弔った島津義弘などを讃える一方で、原始的な神道だけでは成仏思想のような靈的なものにまで高まっていない、などとする(p.142)。戦争について他箇所でも参照(p.63)。

『禅思想史研究』1(1943.7；⇒全集1)；禅思想史3部作の第1で、戦時下でこれのみ刊行された。日本禅における3類型として、道元禅、白隠禅、盤珪禅を論ずる。『盤珪の不生禅』や『浄土系思想論』と同じく専門書であるせいか、戦時言説はほぼ見られない。禅浄一致論も表に出てはいない。

『禅の思想』(1943.9；⇒全集13+岩波文庫)；第1篇；禅思想を大乘仏教に含まれるものの支那で発展したものとして、達磨「安心法門」につき敦煌文献を参照。3祖僧璨の「信心銘」と汎神論的神秘主義、6祖慧能が見性を説き出すことなどから、道元の身心脱落の体験まで。第2編「禅行為」の中で“宇宙靈”という支那民族特有の心理を考察し、靈を用(はたらき)を持つ力と捉える(文庫、pp.225fff.；cf.『禅と日本文化』新書版 p.162に、禅を「宇宙的無意識」と関連付け)。禅浄一致論はとくに主張されないが、“絶対矛盾の自己同一性”の例として親鸞が参照(p.77)。また、浄土系で顕著な法身の人格化が禅では少ない、という対比も(p.239)。戦時言説か？、と思える文言として、個と超個という枠組の中で“国のために死んだ”ことが肯定的に言及されている(文庫, p.156)。『無心といふこと』と共に、敦煌文献研究の所産か。

『日本的靈性』(1944.3；⇒全集8+角川ソフィア文庫)；靈性を“精神”に対抗する原理として提唱+神道について、著作としてはここで初めて本格的に触れる(上記のように、1940『禅と日本文化』や1943『文化と宗教』に神道批判は有り)。「緒言」と第2篇「日本的靈性の顕現」で神道・禅・浄土を並列して位置づける(禅浄一致論はほぼ見られない)。禅と浄土に関しては、第5篇「金剛經の禅」を除いた全集版だと浄土系に関する議論が多く、神道の評価も禅よりむしろ浄土系思想と関わる。

[緒言]神道には、日本的靈性は顕れていない。浄土系思想は印度にも支那にもあったが發展せず、法然と親鸞によって日本的靈性の活動となった。また南方系のインド的直覚性と漢民族の実証的論理性が、日本において禅のうちに日本的靈性となった(文庫, pp.36-42)。なお、禅に関連して「もっとも日本的と考えられて居る神道そのものが禅化して行った」(p.36)ともするが、“禅化”の具体的な解説は無い。

[第2篇]親鸞の靈性的経験は大地から獲得したものである(p.119)。信の一念で大悲者の手に摂取せられること、言挙げせぬことが靈性的直覚につながり、この直覚は日本人に始めて生まれた“日本的靈性”である(pp.134f.)。対して伊勢神道は神道の目覚めであったが、情性的直覚に過ぎなかった。

それは原始的・嬰孩的であり、“あるがままのある”であるが、いまだ否定せられたことのない直覚に過ぎない(pp. 147-155)。

なお戦時体制への迎合的表現としては、第2篇で再びインド的直覚と支那の実証を引き合いに出し、日本的靈性がそれらを共に具有しているので、「大東亜」を一つに動かす思想は日本仏教に探すほかない、という議論が見られる(pp. 95f.)；《←この他、同書における靈性論や戦時言説に関して多くの先行研究があるので、参照文献リストにその一部を掲載する》

小括；ここでの仮称“禅浄一致論”は1942年の『浄土系思想論』辺りまで見られるが、それ以降は浄土と禅とを並列して述べるようになる(とはいえ、敗戦後の著作物でも禅浄一致の考えが見られる場合もある)。同書において“靈性”概念がおそらく初めて本格的に登場し、それは即非の論理(文庫版 p. 67, pp. 167f., p. 235, p. 312)からであった。本発表の主題ではないので詳細な検討はできないが、同書において両者(禅浄一致論と靈性論)がどう結びついていたのかは今後の課題に；+その後の著作で“靈性”は微妙に変化。

戦時言説は、この時期の一般向け著作に比較的多く見られるのでは；《←S.Grace[2015]の p.132 によれば、大拙の英文日記1942年12月5日に、翌年刊行された『文化と宗教』の校正刷りに対する検閲に激怒した文言がある由；ただし、上記『東洋の一』はそれより前の刊行；+refer⇒R.Sharf[1993/95;p.97 彼の民族主義は1935年『禅と日本人の気質』から、と]、B.Victoria[1997/200;p.175『禅と日本文化』につき、既に存在した禅と日本軍との密な関わりを正当化]+禅研究者 B.Faure [1993/2004]は、大拙の宗派的偏見と排外主義、狂信的愛国主義を批判》

3 『靈性的日本の建設』第1篇の構成と神道批判の内容

同書は、1946年9月に大東出版社より刊行された。4部構成のうち第2篇「日本的靈性的自覚について」は3講からなり、1945年6月に大谷教学研究所で講演される予定だった内容の手控えとされるが、講演は行われず、1946年6月に同題で同研究所から小冊子として刊行された(発表者は冊子を未確認；↳同篇第2講については、由谷[2019]参照)。それ以外の3部は書き下ろしである模様。

ここで問題とする第1篇「靈性的日本の建設」は、知性、自由、靈性的自覚、日本的靈性的自覚と神道、『力』と『国体』、という5部構成である。

3.1 前半3パート(知性⇒自由⇒靈性的自覚)について

1 知性；靈性的自覚を考えるため、まず知性から。知性的なものは我他彼此のように二元的である。知性には対象が必要であり、意志の意味、もしくは自由の意味をそこから了解できない。

2 自由；自由とは自ら主となる義で、宗教経験において意味を持つ。政治的自由と宗教経験の上での自由とは異なるように見えるが、概念としては共通する(ナチス、ファッショ、コンミュニズムの場合を例示)。創造は前人未踏の場所に乗るのだから、自由が前提となる。一方で自由は、二元論を背景とする。知性は手のつけられる世界に留まるが、自由を窮めようとする欲求が生まれたならば、知性に自らを超越すべき何か潜在していたことになる。“ベルヂャエフ”の“精神の自由”論などを参照；《←かなり長いパートだが、要点を了解しづらい》

3 靈性的自覚；人間の意識について知性的分別だけでは説明できないので、靈性的自覚という概念を置いてみる。禅録・維摩経・法華経・親鸞・楞伽経などの例から、知性的な分別に欠落しているものが示される。それは絶対の大悲にして大智である。また、仏教では有無以外の無を考える。つまり、靈性的自覚は有無を脱した所にある。トミズム派の神学者マリタンの云う、哲学の支配を受けない神学を参照(←靈性的自覚という意味ではないように思えるが....)。

3.2 日本的靈性的自覚と神道

「靈性的自覚の日本的表現は、とに角、これを神道思想に求めなくてはなるまい」(全集 9, p. 92)として、神道の検討が始まる。まず神道の分類として、神社神道 (民族的慣習)、宗派神道 (靈性的自覚がここから生まれ出る筈だったが、思想的に狭隘で排他的、幼稚な国家主義を含む etc.)、思想神道 (国学、戦闘的・侵攻的 etc.)、と3分類する。さらに思想神道の中に、理論神道と呼ぶべき伊勢神道、吉田神道がある、ともされる；《←同書を批判する鎌田東二[2003]pp.186f.はこの分類を批判するが、この分類自体は、後で見るようにほぼ立論に生かされない》

以上を踏まえ(先の3ないし4分類が生かされているかは疑問だが...)、神道の“輪郭”を次の4項に纏める。①聖典は記紀のとくに神代の巻、②祭政一致を説く、③神に関する明白な觀念の欠如、④高圧的に上から下への屈従を要求(pp. 96f.)。

以上4項から見られるように、神道には宗教性がない、とする。一方で、「日本的靈性的自覚なるものが話されるとすれば、何とかして神道の地盤から発生しなければならないのである」(p. 97)ともされる。

上のように“宗教性がない”と断罪された神道に対して、先の①から④までとの対応が説明されないまま、“宗教的検討”が加えられる。細目は以下の通り；

- a 古事記と日本書紀、b 平田篤胤の神道観、c 記紀と原始性心理態、d 捨身と大悲、e 兒戲的な祓や禊、f 祈りを知らぬ神道、g 死を知らぬ神道、h 代受苦を知らぬ神道、i 『信』のない神道、j 『無意識』に巢作る神道、k 神道の『無意識』的把握、l 『日本は万国の祖国也』、m 神道の神々、n 神道に於ける性欲、o 力の意欲と神道、p 『無意識』—知性的分別—靈性的自覚

先にも参照した鎌田[2003]は、b を初めとする平田篤胤に関わる箇所を中心に大拙に反論してゆくので、本発表ではこれについて立ち入らないことにする。ここでは篤胤問題以外に、同書第2編「日本的靈性的自覚について」でも第2講で検討されたf“祈り”の周辺(およそe⇒i)を見るに留める。

白石光邦『祝詞の研究』が参照され、神道家は現世を否定し現世に還るという靈性的經驗を持たなかった、つまり否定と罪穢を経ることが無かったと批判する。祈りは対象的知性的な祈りと絶対的靈性的なそれとに分けられるが、神道の祈りは前者である。自我中心の感謝で、私欲により、利益交換と同じである。これは封建的利己主義的、奴隸的であり、すなわち神道は祈りに徹しない。神道が祈りを知らず大悲を知らないのは、罪穢を忌むように一たびも自ら死んでいないから。おのれを殺すことによって、おのれより大なるものに生きることができる。神道は天上の生活と大地の生活との間に交渉を見ない。神道は知性的分別に留まるので、本来の“信”を説きえない云々；《⇒第2篇における祈り論については、由谷[2019]を参照+先の①に拘わらず a, c や m での記紀に関する考察が稀少だが、それについては第2篇で山田孝雄『国史に現はれた日本精神』に対する批判として、pp.173-177 で若干議論される》

3.3 『力』と『国体』

力の性格；力は君主専制的政体をとる。神道がこれと結び付いて祭政一致を主張するようになり、君主を現人神とした。忠や信には靈性的自覚に迫るものがあるとしても、力の意欲だけで個己の威厳や価値を無視するなら、それは自己崩壊するしかない。力の意欲を主体とする全体主義の下で、個己の人間の自由・威厳・人格的価値が踏みにじられた。このような制度をいつまでも護持すべきでない。

「君の恵み」は一見情味の発露ではあるが、それに御稜威が加わると個体は絶対否定され、その結

果は全体の崩壊である。

個々の知性的自主的活動；個人的な創意が生かされる自由主義のみが、科学的研究精神と結びつく。この連携が成功している第1はアメリカである(農業の工業化の例など)。東洋民族の間ではそのような運動は、何故か起こらなかった。

事事無礙法界；個人の価値を意識して尊重することは、力以上のものに撞着しない限り出て来ない。自らを否定することで、より大なるものに包まれることができる。仏者はこれを平等即差別、差別即平等と云う。それを別の言葉で現すと事事無礙法界であり、これが「絶対の現在」である。

事事無礙の生活面；否定即肯定の即非論理を認めることになるから、全体主義は成立しない。靈性的日本の建設は、事事無礙法界を生活の実際に映したものでなければならない。万世一系、現人神ということだけでは、世界における日本存在の特異性は意味づけられない。

国体と法界曼荼羅；万世一系ということ自体には意味がないが、個己が事事無礙法界の中に価値を持つという認識、あるいは理想が貫通している中核が、万世一系の天皇に象徴されていると考えたい。天皇が高天原から降り、万民の仲間入りをすることによって、個個円成であると同時に事事無礙となり、このようにして靈性的日本は建設せられる(↳ スライドの図は全集9, p. 148)。

3.4 小括

先に参照した鎌田東二[2003]は、上記よりも詳しく大拙の立論をフォローし、逐一反批判をしているものの、大拙の主張の中心が平田篤胤批判であると解釈し(p. 195)、篤胤の靈性観はそうではなかった、という方向に議論を進める。さらに続けて、pp. 199-208 で日本において“靈性”の語がどのように使われてきたか、と展開してゆくので、それはもはや大拙靈性論から逸脱してしまっている。

もう一つ注目すべき大拙批判として小堀桂一郎[2014]は、大拙が壮年期において大正デモクラシーに影響を受けたため、占領軍の振り回す民主主義イデオロギーに疑問を感じないのだ、と些か短絡的な評価を加えている(pp. 82f.)。それはともかく、小堀も捨身・大悲・禊祓・祈り・信などに関する大拙の所論を概要する。しかし、それを途中で止め、それらが“米占領軍当局の謀略宣伝の受売り以上のものではない”(p. 85)、と結論づける。

大拙の周囲に禅研究に興味を持つ占領軍関係者が集まってきたことは、R. Jaffe[2010/14]も述べている。しかし、『靈性的日本の建設』は序の末尾に「昭和20年初冬」と明記されており、この時点でそうだったとしても、占領軍の“謀略宣伝”が進駐後3ヶ月ほどで小堀の云うように本邦内にあまねく流布するようになっていたのか、に関しては疑問ではないだろうか。

むしろ上に概要したように、鎌田や小堀が反批判しようとした第1篇の4「日本的靈性的自覚と神道」より5「『力』と『国体』」の方が、(神道批判が主でないとしても)趣旨が明解なのではないか。とくにこの箇所では、天皇を中心とする新しい国家像である“靈性的日本”を建設することが主張されており、禅と浄土教に日本的靈性の粹を求めるという前作『日本的靈性』から、“靈性”の意味を含め立論が相当変わっている；《←なお、第2篇冒頭p.154で、“靈性”の語を靈の概念に沿って再検討している；今回の発表で設定したテーマと直接関わらないため、残念ながら本発表では検討を省略するが、大拙靈性論の変化という点ではきわめて興味深い》

これらの点については、柳田について検討した後、再度考察することにしたい。

4 柳田『祭日考』所収「氏神の研究」

同テキストの位置づけ；先の日本宗教民俗学会 9 月例会でも少し触れたように、柳田「新国学談」のうち『祭日考』と『山宮考』については、ずっと後になった上梓された『炭焼日記』（修道社、1958）に執筆事情がしばしば言及される。1945 年 11 月 9 日に「『先祖の話』校正了」とあり、翌 10 日に「『新国学談』の計画」などがある。9 月例会でも見たように、それに先だって 9 月 9 日と 10 月 14 日の木曜会で、山宮に関係する話をしていた。

『祭日考』に関しては 11 月 19 日に「夜『祭日考』にかかる」とあるのが、おそらく起稿であろう（「新国学談」の計画を立てて、1 週間余り後）。翌 20 日に「『祭日考』を少しばかり書く」とあり、23 日に「『祭日考』の整理、原稿の袋見えず」云々と原稿を探す話が書かれる。

その後、『満濟准后日記』や『看聞御記』を読む話がしばらくあり、12 月 9 日に「『祭日考』の準備にかかる」とあるので、執筆を再開したのか。17 日「『祭日考』続稿」とあり、18 日「『祭日考』156 枚かく」、19 日「『祭日考』145 枚かく」とあり、24 日と 25 日に「『祭日考』を了る、150 枚ほど」、「『祭日考』を書き了る」と 2 日に渡って脱稿が記載される。翌 26 日にも通読したことが記され、「暮に完了してよかつた」とある。9 月例会でも述べたが、この間、同 12 月 15 日に占領軍による神道指令 (Shinto Directive) が出されている。

しかし、この“150 枚ほど”というのは、^{おやま}小山書店から 1946 年 12 月と約 1 年後に「新国学談」第 1 冊として上梓されたうち、いわば巻頭論文である「祭日考」（同書 pp. 1-121）を指すと考えられる。2 が 1944 年中に書いたと冒頭の「解説」にある「耳の文学」、3 が疎開児童用の読み物として書いたとされる「祭のさまざま」、4 がここで問題とする「窓の燈」で、「書齋からの小さな消息」などとある。5 は「新国学談」とされ、「筆者晩年の文集」ゆえ「解説の必要なる所以」云々とあるが、この第 5 パートは小山書店本に見られない（目次にも掲載無し、定本 11 および新全集 16 も同上）。

なお、『炭焼日記』には同年 12 月 29 日に「『窓の燈』の原稿了」とあり、新全集 16 の解題 p. 533 ではそれと併せて、典拠不明ながら翌年 9 月 10 日に補筆したとされている（新全集「別巻」I の年譜にも同年月日に「窓の燈」を書く、とされている）。ということで、ここで問題とする「氏神の研究」の書かれたのが 1945 年末なのか翌 46 年 9 月なのかは不明、ということになるろう。

「氏神の研究」；「窓の燈」の第 3（他タイトルは省略）。『新国学談』において“氏神の研究”を行おうとした心境を縷々述べたもの。典型的と思える 2 箇所を引用するに留める。まずは冒頭から。

新国学談を世に出す為には、自分は文字通り寝食を忘れて居た。どうして又其様にまで、急いで此本を書いて置かうとしたのか。心有る人ならばすぐにその下心を看破ることが出来るが、看破られるよりも自分で語つた方がよい。神社はどうなるだらうかといふことは、如何にも今日は万人の疑問となつて居る。さうして稀には大胆にその疑問に、答へやうとする人も無いとは限らぬが、正直にいふと誰にもそんな資格は無い。日本人の予言力は既に試験せられ、全部が落第といふことにもう決定したのである。（定本 11, p. 281 // 新全集 16, p. 99 ; 下線は引用者）

次は、最終第 4 段落の後半。国土の構成から日本に地方差があることを踏まえ、新国家を確立させる為に何が求められているか、を論じた箇所である。

我々は今まで考へて見ようともせず、又どうであるかを突留めようとしなかつたが、善いにつけ悪いにつけ、日本人で無ければといふ物の見方、感じ方といふものをまだ色々と持つて居る。家と靈魂との繋がりなども、その一つだが、言葉では現はせない幾つかの約束が、村の神様と住民との間にも、昔ながらになほ伝はつて居て、それが年々の祭を指導して居るやうに思はれる。是を宗教といふ名で呼んでよいか

どうかは、宗教史の学徒だけの問題で、少なくとも今まで我々はそんな名は知らなかつた。たゞいつからとも無くさう信じたといふ事実があるだけである。信仰も事実である以上は、やがては消えて無くなる日が来るかも知れない。無くしてしまはうといふ努力が加へられるかも知れない。以前の国家は敬神といふ政策を以て、それだけは防止しようとして居た。ところが今回はその防衛を撤し去つて、勝手に我々に自分の道を歩ましめようとして居るのである。(定本 11, p.284 // 新全集 16, pp.101f.; 下線は引用者)。

見られるように、柳田は国家神道の敬神政策に一定の評価を与え、敗戦による氏神信仰の行方に危機感を抱いていたことが分かる。柳田の敬神政策支持については、後に刊行された「敬神と祈願」(in『氏神と氏子』1947)にも似た立論が見られることを、由谷[2019]で指摘したことがあった。

5 結び；敗戦直後の鈴木大拙と柳田國男における神道・神社

まず、これまでの議論を踏まえつつ、両者の戦時体制との関わりから。

柳田は、(心の中はいざしらず)実際に書かれたものには戦時体制への協力姿勢が濃厚であった(refer⇒由谷[2020][forthcoming])。また、実際には参列しなかつたともされるが(↳後藤総一郎[1988], pp. 923f. ; 新全集別巻 I の p. 313 でも欠席とする)、1944 年 12 月 8 日に高浜虚子、折口信夫らと行っていた戦勝祈願の連句を明治神宮に奉納している。この戦勝祈願は日本文学報国会の理事としてであり、大政翼賛会の会議にも度々参加していた。

一方大拙は、S. Grace[2015] pp. 130ff. によれば“ヨハンセン”(吉田茂を中心とした戦争回避、和平画策グループの通称; refer⇒J. Dower[1979/91])のメンバー複数(含; 牧野伸顕、近衛文麿)と親しかったとされる。また、情報源は古田紹欽らしいが、海軍内部の会議に西田幾多郎、小泉信三、長谷川如是閑らと共に参加して、戦争終結について話し合ったことが pp. 133f. に載る(『禅の思想』岩波文庫版の小川隆による解説 p. 332 にも、類似内容が掲載)。英文日誌の内容については、前述の通り。対して本発表で見たように、一般向けの著述においては戦時体制に相当迎合した表現が見受けられた；《←検閲対策だったのか?》

続いて、神道指令成立の経緯について。

占領軍総司令部民間情報教育局の顧問役を務めた岸本英夫[1963]や、在野の“神道人”葦津珍彦らの盡力によって宗教法人として発足した神社本庁の機関誌を刊行する神社新報社[1971]によれば、占領初期において神社の命運は際どいものであったらしい。しかも、当時の神祇院(1940 年に国家神道を普及させる為にできた組織)の反応は、神社非宗教論を堅持しようとするなど悠長なものだった由。

むしろ、葦津や皇典講究所の吉田茂のような民間人が動き、吉田は外務省に(同姓同名の)吉田外相を訪ねてGHQに偵察してくることを告げ、11月8日にGHQを一民間人の資格で訪問し、神社が民間法人として自立する意向であることを宗務課長のバンス大尉に告げた(後者 p. 26, pp. 240-244 に会談内容、岸本本でも pp. 64ff. で「神社界にとって歴史的な意義をもつ」と指摘)。

結果から見れば、12月15日に出された神道指令は、前月の吉田・バンス会談の路線上にあったことになる。日本側が危惧したとされる伊勢神宮については触れられず、また靖国神社・護国神社の扱いは今後に残された。神道指令の後、12月28日に宗教法人令が勅令の形で出され、それを踏まえて翌1946年2月に神社本庁が成立した。その前1月に神祇院が廃止された。

本発表で見てきた大拙・柳田による神道・神社論は、このような動きとどう関わっているのか。

神道指令以降の両者；上記のように柳田については、『炭焼日記』情報に加え、「氏神の研究」で先に引用した箇所にも国家神道による敬神政策が廃棄されたことに対する危機意識が表出していたことから、それが神道指令以降に書かれたのは明白であろう。

もともと、この時期の柳田の関心は、敬神が失われることに対する危機感ばかりではなかった。1946年12月に「婚姻の話」として発表された論(のち「子無しと子沢山」と改題され、1948年岩波書店刊『婚姻の話』に再録)では、主婦の地位が得がたいこと、出産が飢饉などで制約される場合があることと対比させて、遊女が言及される。『婚姻の話』に収録されたうち戦後の所論では、他にも遊女が言及されている(「女の身すぎ」「出をんな・出女房」)。また、1947年6月刊の『山宮考』に収録された「おしら神と執り物」(近年、1943年7月執筆との赤坂憲雄による推定が通説に)では、家々で祭る神(氏神と等しいか)の祭主を主婦だと断定する記載がある(新全集 16, p.203);⇒このような、家—婚姻—主婦/遊女—氏神といった枠組での考察も別になされていた;《←民法改正 1947. 12 と関連?;↳ refer 福田アジオ[1989]》

対して大拙『靈性的日本の建設』第1篇が書かれた時期は、序に「昭和20年初冬」とあるだけで詳細は分からない。しかし、本としての出版は1946年9月であり、やはり神道指令を踏まえて書かれたと推定しておきたい。同指令によって国家による神社の保護が否定されたことにより、神道批判が自由にできるようになった後、同書が書かれたのであろう。

もともと、第1篇の4「日本的靈性的自覚と神道」における神道批判については、本発表で先に参照したそれまでの神道批判(『禅と日本文化』『文化と宗教』『日本的靈性』)や、第2篇における神道批判(↳refer 由谷[2019])と比べても、検閲があった時代と熱の入り方が異なるとはいえ新味は乏しい。4のeで参照される(全集 9, p. 107)白石光邦『祝詞の研究』(1941)は、当時の宗教民族学を踏まえて祝詞に反映する“祈り”の歴史的経緯を追究した重厚な研究だが、大拙が引用したのは“浄土”の語が出る部分のみ(篤胤に関しても、個々の著作を踏まえた批判ではない)。

むしろ、先にも述べたように(神道批判が主でない)5『力』と『国体』の方が、趣旨が明解ではないか。1944『日本的靈性』第5篇「金剛經の禅」後半(文庫 p. 414ff.)で華嚴に触れ、1946年4月に昭和天皇と香淳皇后に御進講した「仏教の大意」、第2講での主なテーマも華嚴と考えられる。両者は、第1篇5において主張される、万民に降りてきた天皇を含む事事無礙の法界と通底しているのでは;《refer 大拙の華嚴観を戦後の世相並びに彼の浄土教観と併せて考察した論として、竹村牧男[2018]がある》

また、本発表で推測したように“靈性”概念が大拙の禅浄一致論と連関していたとすれば、『靈性的日本...』における使い方は、もはやそこからはかなり懸隔のあるものとなっていた;⇒大拙のこうした“靈性”概念の変化については、彼が再び神道批判を展開する『日本の靈性化』(法藏館, 1947)を検討する機会が来ることを俟って、その時に再考したい。

《参照文献；柳田と大拙の著作物以外》

安藤 礼二『大拙』講談社, 2018

石井 修道「道元の靈性批判—鈴木大拙の靈性と関連して」、『駒澤大学禅学研究所年報』2, 1991

ブライアン・ヴィクトリア(Brian A. Victoria)『禅と戦争』光人社, 2001(原著 1997)

大熊 玄「鈴木大拙の無心と日常性」、『北陸宗教文化』19, 2007

——「鈴木大拙『日本的靈性』における神道 —戦時下における表現手法—」、『北陸宗教文化』30, 2017

——「鈴木大拙による神道と「靈性」の比較 —『日本的靈性』における「不立文字(ことあげせぬ)—」、『比較思想研究』44, 2018

- 鎌田 東二『神道のスピリチュアリティ』作品社, 2003
- 岸本 英夫「嵐の中の神社神道」(初出 1963), 『岸本英夫集』第 5 卷, 溪声社, 1976
- 北野 裕道「日本的靈性的自覚と大地」, 『宗教研究』65-1(288), 1991
- 桐田 清秀「戦時中の鈴木大拙」, 『日本の哲学』10(昭和堂), 2009
- ステファン・グレイス(Stefan Grace)『鈴木大拙の研究』(駒澤大学博士論文), 2015 学位授与
- 黒崎 浩行「祈りの類型論とその批判的文脈—鈴木大拙の神道・国学批判—」, 『宗教研究』80-4, 2007
- 後藤 総一郎(監修)『柳田国男伝』三一書房, 1988
- 小堀 桂一郎「昭和期神道理解の二側面—鈴木大拙と和辻哲郎—」, 『明治聖徳記念学会紀要』復刊 51, 2014
- ロバート・H・シャーフ(Robert H. Sharf)「禅と日本のナショナリズム」, 『日本の仏教』4, 1995(原著 1993)
- リチャード・ジャフィ(Richard M. Jaffe)「いま, 大拙を読む」, 『思想』1082, 2014(原著 2010)
- 神社新報社(編)『神道指令と戦後の神道』神社新報社, 1971
- 末木 文美土「内への沈潜は他者へ向いうるか」, 『思想』943, 2002
- 「大拙の戦争批判と靈性論」, 松ヶ丘文庫(編)『鈴木大拙没後 40 年』河出書房新社, 2006
- 「大拙の両面—思想的深化と世界への発信」, 『現代思想 臨時増刊号 鈴木大拙』青土社, 2020
- 杉本 耕一「鈴木大拙『靈性』再考—道元の「禅宗」批判を手引きとして—」, 『北陸宗教文化』24, 2011
- 関 一敏「『東国の学風』について—鈴木大拙と柳田國男—」, 『宗教研究』84-4, 2011
- 竹村 牧男「大拙の浄土観—還相の問題をめぐって—」, 『宗教研究』65-1(288), 1991
- 「大拙の華嚴学」, 『現代思想 臨時増刊号 仏教を考える』青土社, 2018
- 立川 武蔵「戦前・戦中の日本における仏教思想批判—特に鈴木大拙について—」, 『東海仏教』61, 2016
- ジョン・ダワー(John W. Dower)『吉田茂とその時代』上下, 中公文庫, 1991(原著 1979, 原訳書 1981)
- 新田 智通「日本的靈性と真宗」, 『北陸宗教文化』24, 2011
- 袴谷 憲昭「禅宗批判」, 『駒澤大学禅研究所年報』創刊号, 1990
- 橋本 芳契「鈴木大拙の浄土教観について」, 『真宗研究』13, 1968
- 蓮沼 直應『鈴木大拙—その思想構造』春秋社, 2020
- ベルナルド・フォーール(Bernard Faure)「禅オリエンタリズムの興起—鈴木大拙と西田幾多郎—」上下, 『思想』960 & 961, 2004(原著 1993)
- 福田 アジオ「柳田国男における歴史と女性」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』21, 1989
- 堀江 宗正「『日本的靈性』をひらく」, 『現代思想 臨時増刊号 鈴木大拙』青土社, 2020
- ミシェル・モール(Michel Mohl)「近代「禅思想」の形成」, 『思想』943, 2002
- 守屋 友江「アメリカ人に説く禅と真宗」, 『宗教研究』92 別冊, 2019(オンライン)
- 山折 哲雄『アジアイデオロギーの発掘』勁草書房, 1968
- 由谷 裕哉「敗戦をまたぐ二つの神道論—柳田國男「敬神と祈願」と鈴木大拙「日本的靈性的自覚」第二講」, 『比較思想研究』45, 2019
- 「柳田國男の戦時下における祭祀論と戦争協力」, 『宗教研究』93 巻別冊, 2020(オンライン)
- 「柳田國男「山宮考」における靈山と神社の捉え方:とくに富士山に注目して」日本宗教民俗学会 2021 年 9 月例会配付資料(<https://researchmap.jp/read0040709/presentations/33644334>)
- 「柳田國男の戦時言説としての氏神合同論」, 『日本研究』64, forthcoming(オンライン)
- 吉永 進一「近代仏教史における鈴木大拙」, 『宗教哲学研究』29, 2012